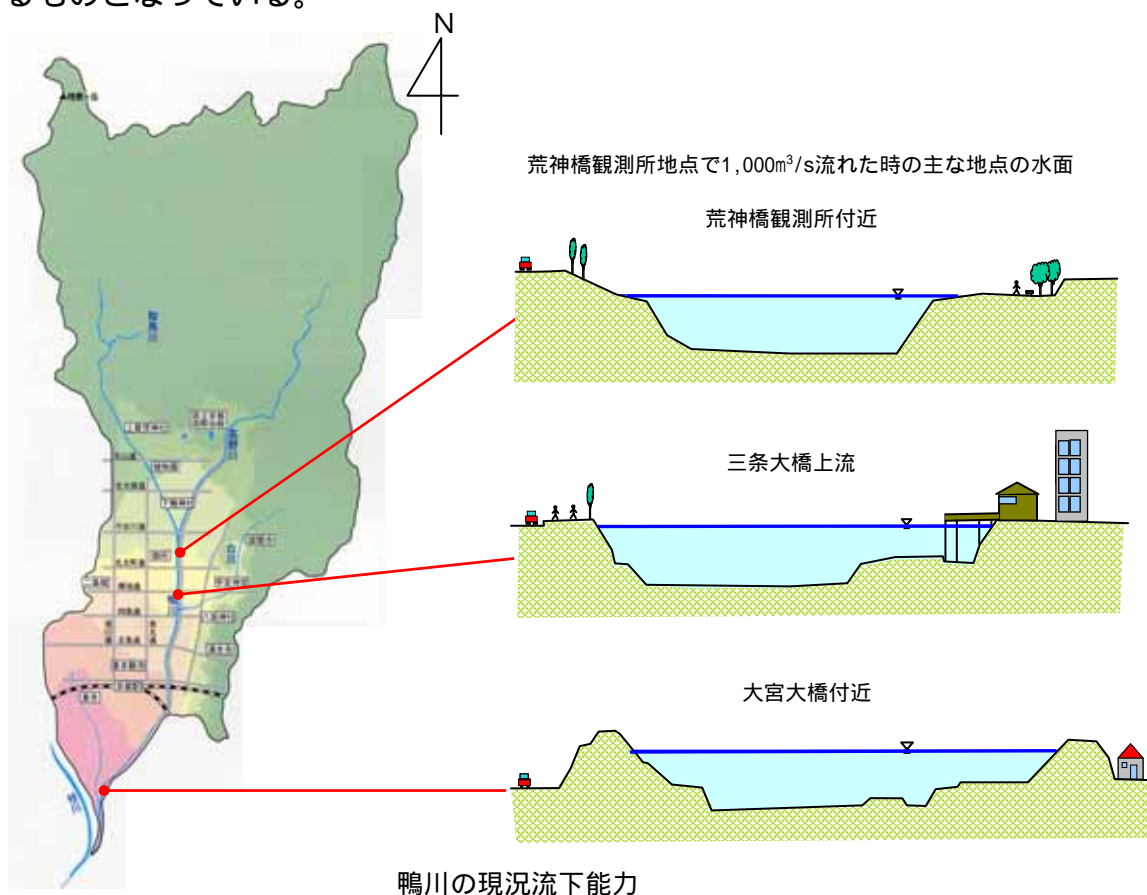


## 1.3 現在の鴨川

### 1.3.1 鴨川の治水

氾濫を繰り返してきた鴨川の治水は、前述のとおり、平安時代にまでさかのぼり、その後も鴨川の氾濫から京を守ることは時の為政者の重要な課題として様々な対策が講じられてきた。近年では、昭和 10 年の水害を契機とした大規模な改修が行われ、引き続き、その当時暫定改修となっていた三条～七条間の改修が進められてきたところである。

現在においても、着実に治水安全度の向上を図るため、川幅が狭くなっているなど流下能力の低い区間の対策が重点的に進められており、これまでに橋脚の数が多く流水に影響を与えていた JR 奈良線橋梁の架替が完了し、引き続き、陶化橋上流付近での改修が行われているところである。これらの整備により、現在の鴨川は、荒神橋観測所地点において最大で概ね毎秒  $1,000\text{m}^3$ <sup>1)</sup> の洪水を流すことのできる能力を有しており、これは鴨川で戦後最大と言われる昭和 34 年 8 月の洪水にも対応できるものとなっている。



<sup>1)</sup> 鴨川において堤防又は河岸の高さ満杯で溢れることなく流れる流量を算出し、そのときの荒神橋観測所地点における流量

【整備前】



【整備後】



J R 奈良線橋梁改築

【整備前】



【整備後】



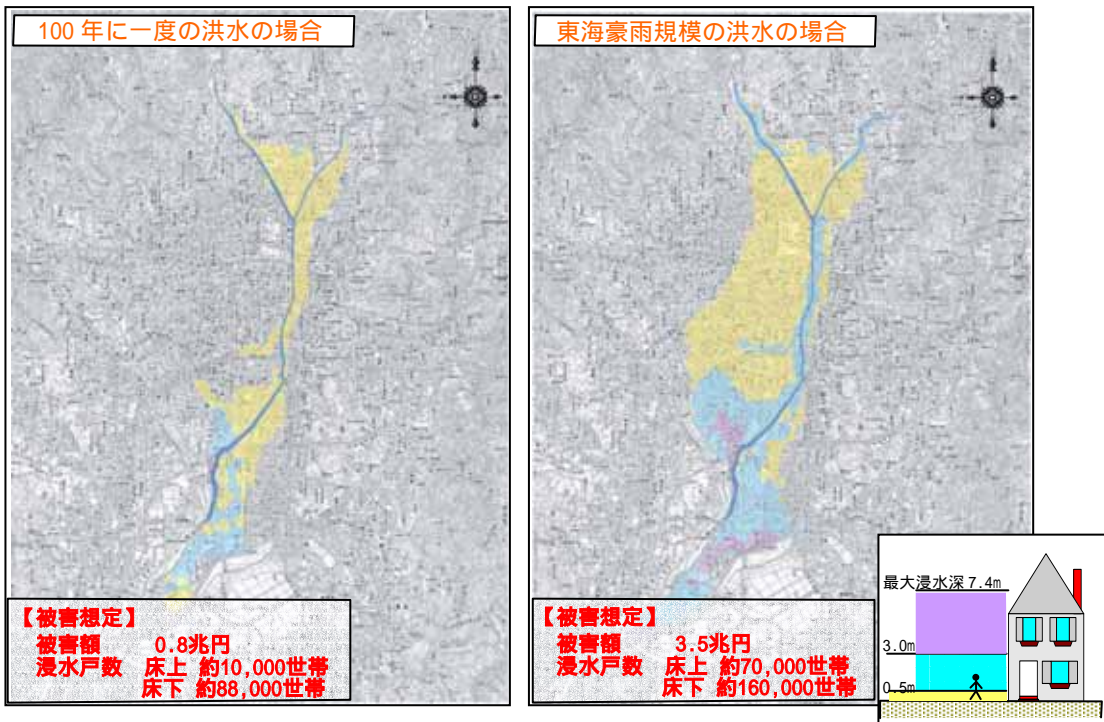
陶化橋上流付近の改修

一方、万一の洪水による被害を最小限のものとするため、京都府では平成 15 年 5 月に浸水想定区域図<sup>1)</sup>を公表し、これをもとに京都市では平成 17 年 3 月に各行政区ごとの防災マップ<sup>2)</sup>を作成した。また、平成 16 年 6 月から水防活動や避難の目安となる情報を提供する洪水予報<sup>3)</sup>が開始され、平成 17 年からは鴨川流域を含む京都府全域の河川を対象として、流域の雨量や水位のリアルタイム情報もホームページ上で公表されているところである。

<sup>1)</sup> 浸水想定区域図：大雨によって河川が氾濫した場合に、想定される浸水区域とその深さを表した図

<sup>2)</sup> 防災マップ：浸水想定区域図をもとに、避難場所など水害時に住民が安全な場所へ避難するために必要となる各種情報を表した図。京都市では、水害のほか地震災害に対する防災マップも作成されている。

<sup>3)</sup> 洪水予報：气象台と京都府が共同し、河川の氾濫のおそれが予想される場合に「洪水注意報」や「洪水警報」として発表するもの。京都市等の防災関係機関及び報道機関を通じて沿川住民等へ通知される。



鴨川・高野川浸水想定区域図



鴨川・高野川洪水予報（発令時のイメージ画面）

### 1.3.2 鴨川の河川環境

鴨川の河川環境は、昭和 40 年代、都市化の進展に伴い、家庭や工場等からの排水やゴミの投棄により著しく悪化した。とりわけ、染色工場からの排水は、染料を含んだまま鴨川に流れ込み、川の水を紫色に染めていた。しかしながら、その後の排水規制や下水道整備に加え、「鴨川を美しくする会」など市民レベルでの美化活動のたゆまぬ努力と相まって、現在では、世界の大都市の中でも希な良好な水辺環境が保たれている。



市民による鴨川美化活動（鴨川クリーンハイク）  
提供）鴨川を美しくする会

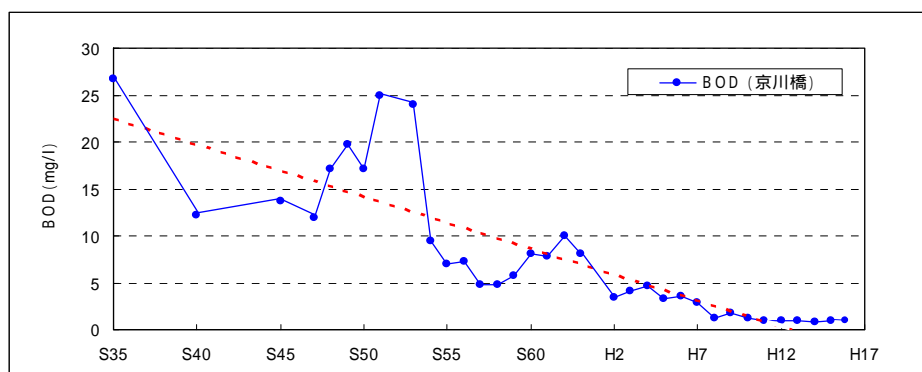


昭和 40 年 4 月 11 日の  
新聞記事（朝日新聞）

鴨川上流域は、針葉樹を主体とする豊かな森林に覆われており、山間を流れる鴨川の水質は、柘野堰堤の上流にある高橋地点における BOD の年間平均値（平成 16 年度）が 0.5mg/l 以下と極めて良好であり、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオも生息する豊かな自然環境が保持されている。

鴨川中下流域は、京都市の中心市街地を貫流する区間であり、特に上賀茂から七条大橋付近にかけては「鴨川公園」、「花の回廊」など良好な水辺環境が整備されている。中下流域の水質も比較的良好であり、三条大橋地点や桂川合流部に近い京川橋地点における BOD の年間平均値（平成 16 年度）は、それぞれ 0.5mg/l、0.7mg/l となっている。河道内には、北大路橋付近より上流にツルヨシの群落、また、竹田付近から桂川合流部付近にはヨシ群落が形成されており、アユ、オイカワ、カワムツ、カマツカ、カワヨシノボリなどの魚類や、カワセミ、ユリカモメ、カルガモ、コサギ、アオサギ、セグロセキレイ、イカルチドリ、イソシギなどの鳥類の生息が

多く確認されている。



鴨川（京川橋）における水質（BOD<sup>1)</sup>）の推移



ヨシ群落



ユリカモメ



オイカワ



カワセミ



イカルチドリ



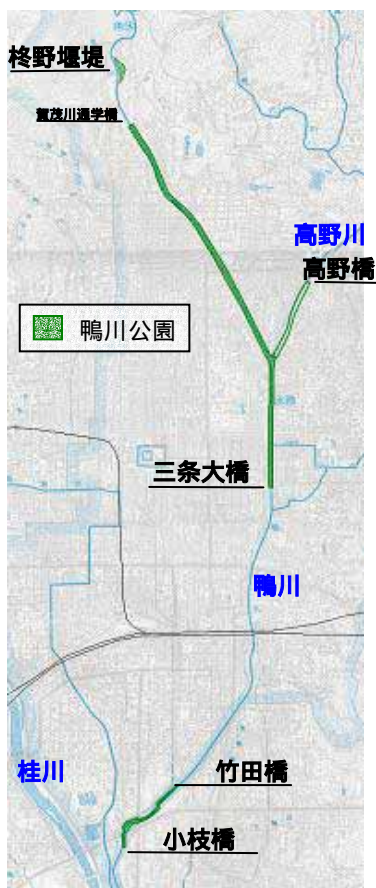
オオサンショウウオ

### 1.3.3 鴨川における河川利用

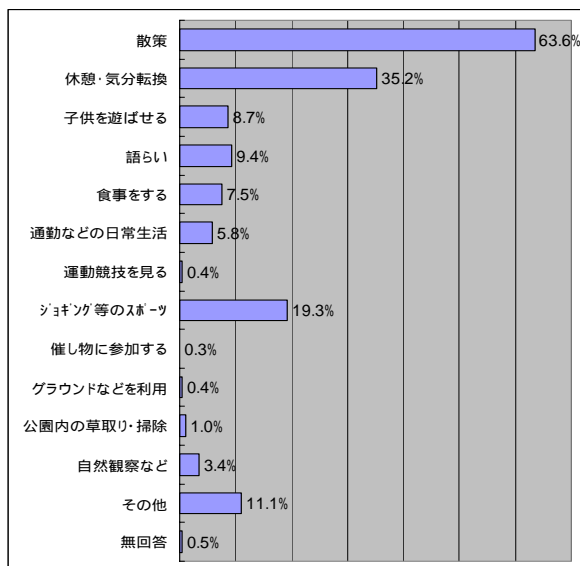
鴨川は、京都市の中心市街地にあつて、訪れる人の心を和ませ、開放感を与える貴重なオープンスペースである。現在の鴨川の姿は、昭和の大改修によってほぼ形づくられたものであり、石積の護岸により固められた直線的な河道は、北山の山並みを望む見事な眺望景観を創り出しており、多くの人々に愛されている。また、春には半木<sup>なからぎ</sup>の道のシダレザクラや「花の回廊」に植えられた様々な花木が川縁を彩り、夏には京都の風物詩となっている納涼床が建ち並ぶなど、季節を感じながら四季折々の水辺を楽しむことができる。

<sup>1)</sup> BOD (Biochemical Oxygen Demand): 生物化学的酸素要求量。水の汚れの度合いを示す指標で、好気性微生物が一定時間中に水中の有機物(汚物)を酸化・分解する際に消費する酸素の量で示される。したがって、値が大きいほど水中に有機物が多く含まれており、汚れの度合いが大きい。

鴨川の中流部は都市公園に指定されており、芝生広場や散策路、ベンチや案内サインが設けられている。鴨川を訪れる人は年間で延べ 300 万人にも及び、散策、ジョギング、各種レクリエーションやイベント、テレビドラマ等の撮影など様々な形で利用されている。



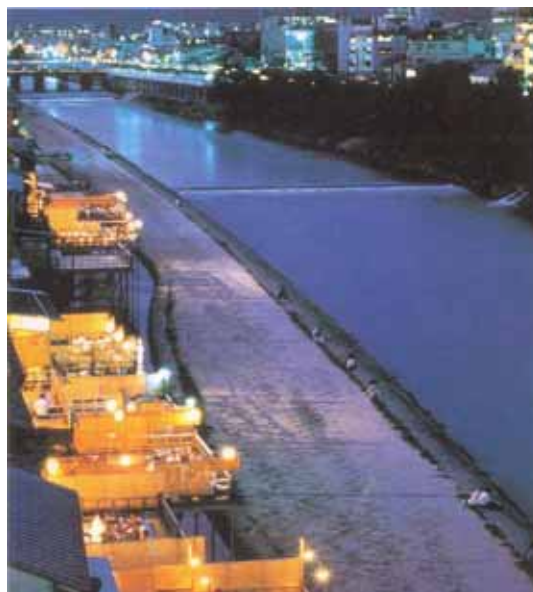
鴨川公園位置図



鴨川の利用目的 (鴨川利用調査「平成 14 年 3 月」)



府民の憩いの場である鴨川



鴨川納涼床

出典)「提言・京都の川づくり」